



筑摩世界文學大系

47

モーパッサン

宮原 信
中村 光夫 訳
杉 捷夫



筑摩書房

筑摩世界文學大系 47

昭和四十六年八月十六日

初版第一刷発行

モーパッサン

訳者

宮原 信
中村 光
杉 捷

発行者

竹之内 静雄

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷 三晃印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20647 (出版社) 4604

目次

女の一生

宮原 信訳 5

ベラミ

中村 光 夫訳 125

脂肪の塊

杉 捷 夫訳 299

短篇

杉 捷 夫訳

山小屋

323

ペルル嬢

331

橄欖畑

341

シモンのパパ

357

わら椅子直しの女

363

狂女

367

海の上のこと

370

ジュール叔父

373

ひも

378

年 解	モ	港	あ	帰	酒	く	雨	老
譜 説	ー		な	村	樽	び	が	人
	パ	ク				か	さ	
	ッ	ロ				ざ		
	サ	シ				り		
	ン	ェ						
		ット						

中 出	ブ							
村 淵	リ							
光 エ	チ							
夫 博	ッ							
	ト							
434	427	421	414	410	405	401	398	392
								387
								382

モ
ー
パ
ッ
サ
ン

女の一生

ささやかなる真実

ブレヌ夫人*

忠実な友より、また
亡き友を思いて

一

ジャンヌは荷造りがすむと窓ぎわまで行つてみた。しかし、雨はやみそうもなかった。

ひと晩じゅう、豪雨が窓ガラスや屋根にぶつかって音を立てていた。まるで、たつぷり水氣を含んだ低い空が破裂して、中身が洗いさらい大地に向つて流れだしてきたかのように。水でうすまった地面がぐちゃぐちゃの粥となり、砂糖のように溶けていった。ときおり重苦しい熱氣をいっばいにはらんだ突風が吹いた。

溢れたどぶが、人氣のない通りいっばいに唸り声をあげ、立ち並ぶ家々がスポンジのように吸い込む湿氣が建物の中に浸み込み、地下室から屋根裏部屋まで、家中の壁に汗をかかせていた。

ジャンヌは昨日、尼さん経営の寄宿学校を卒

業したばかりのところだった。つまり、これであらうとう生涯自由の身になったのだ。今、彼女は、前々から夢に見ていた人生の幸せを、残らず掴もうと待ちかまえている。ただ、このままの天気では、父が出発をためらうのではないから、それだけが心配だった。で、こうして今朝からもうなん回となく、遠くの空を眺めているのだ。それから、使いなれた厝を旅行鞆に入れ忘れたことに気づいた。図案模様のまん中に、1819と金文字で年号の入った、月ごとに仕切った小さなボール紙をはずした。それから、一つ一つ聖人の名前に鉛筆で線を引きながら、はじめの四つの仕切りを消し、尼さんたちに別れを告げた五月二日まで来た。

ドアの向うで呼ぶ声がした。

「ジャネット！」

「どうぞ、パパ」

ジャンヌが答えた。そして、父親が姿を現わした。

男爵シモン・ジャック・ル・ベルチュイ・デ・ヴォは、頑固で氣のいい、ひと昔前の貴族だった。ルソーの熱烈な崇拜者として、彼は、自然を、野山を、森を、動物たちを、恋人のようになやましく愛していた。

生れつきの貴族だったから、本能的に九三年(一七九三)憎んではいしたが、氣質的には進歩派だったし、受けた教育の結果は民主派でもあり、専制政治は大嫌いだ。もっともそれも、毒にも薬にもならない大げさな文句を並べたて

だけのことだったが。

その人のよさが、男爵の強みとも、弱みともなっていた。愛無し、与え、抱きしめるのに、何本腕があつても足りない底抜けの善良さ、散らばり過ぎてけじめのない創造主の善良さ、意志の神経がどこか一本麻痺したような、生活のエネルギーに欠陥があるような、美德よりは悪徳に近い善良さだった。

理論家だった男爵は、娘を善良で正直な、すなおな人間にしたであげ、幸せな一生を送らせようとして、前々から一大構想を抱いていた。

ジャンヌは十一の年まで両親の膝もとで暮し、それから、母親が泣いて悲しんだにもかかわらず、聖心修道会の寄宿学校に入れられてしまった。そこに閉じ込められた娘は、ほんものの尼さんのように、誰からも知られず、また人間世界のなにごとにも知らずに、厳重な監視を受けて暮した。十七になったら、無垢なままの娘を手もとにひきとって、今度は男爵自身がいわば合理主義的な詩の雰囲気になら彼女をすっぽりつけてしまおうともくろんでいたのである。田舎で、肥沃な大地のまっただ中で、素朴な愛の営みを、動物たちのすなおな愛を、大らかな生命の法則を目の当り見せながら、魂の目を開き、無智をときほぐしていく。そう男爵は考えていた。

今、ジャンヌは、若い命に満ちあふれ、幸福への渴望に燃えながら、意気揚々と寄宿舎生活に別れをつげたところだ。昼間の無為、夜の長き、希望の孤独の中で、すでに彼女の想像力が

なんどとなくかけめぐった、もろもろの遊びを、胸のときめく偶然を、いつやって来ても掴まえられるように、待ち構えていたのだ。

わずかに桃色があった貴族特有の肌、その肌はまだ濡み込んだかのような金髪的光沢。かすかなうぶ毛が影を落し、そこに日の光が当たると、色のうすいビロードのように見える。まるでそれは、ヴェロネーゼ(十六世紀イタ)の筆が描いた一幅の肖像画のようだった。目は青かった。オランダ製の陶器人形の、あの不透明な青だった。

左の鼻柱にはくろろが一つ、それと、右顎の上、ほとんど皮膚と見分けがつかない髪の毛が二、三本カールしているあたりにもう一つ。胸の発達した、体つきのしなやかな、背の高い娘だ。よく通る彼女の声は、ときどき、耳ざわりなほど甲高くも聞えたが、くったくのないその笑いは、いつも周囲に喜びをまき散らしていた。彼女はよく、両手をこめかみに持っていて、髪の毛を撫でつけるようにした。

父親の前まで走っていくと、両手で抱きしめながらキスをして言った。
「ねえ、出かけるんでしょ？」

父親はにっこり笑うと、もう真白な、かなり長い髪の毛を左右に振って、窓のほうを指さしながら、

「こんな天気には旅行はむりだよ」

しかし彼女は、甘えた声で小さな子のようにねだった。

「でも、パパ、お願い！ 行きましょうよ！」

お昼過ぎには晴れるわ」

「ただ、お前、ママがうんとは言わんよ」

「だいじょうぶ、受けあうわ。私にまかせて」

「ママさえいいって言や、わしはいいよ」

とたちまち彼女は、男爵夫人の部屋に向ってかけだしていった。それと言うのも、彼女はこの出発の日を、日まじに強くなる待ちきれぬ思いで待っていたからである。

聖心修道会の寄宿舎に入ってから彼女は、父親の決めた年齢に達するまではいかなる種類の気晴しも許されず、ルアンの町を出たことすらなかった。ただ、二度だけ、パリに二週間ほど連れていってもらったことはある。しかし、バリもやはり都会である。彼女はひたすら田舎の生活を夢みていたのだ。

彼女はこれから、ブルルの邸で夏を過ごすことになっていた。イボールの近くの断崖の上に建っている、先祖代々伝わる古い邸である。彼女は、海辺での自由な生活を、胸をときめかせて待っていたのだ。それに、邸は彼女が貰うけ、将来結婚したらずっとそこに住むということまで決まっていた。

で、前の晩から休みなく降りつづける雨が、彼女の生涯の最初の大きな悲しみというわけだった。

しかし、それから二、三分すると、彼女が母親の部屋からかけだしてきて、家中に響く声で叫んだ。

「パパ！ パパ！ ママがいいですって。早く

車の用意をさせて」

豪雨はいっこうにおさまる気配も見せず、むしろ馬車が玄関口にやってきたころには、いっそ激しさを増したかのようだった。

ジャンヌが車に乗ろうとしていると、男爵夫人が、夫と、がっしりした、男のようにたくましい、背の高い女中に両脇を支えられて、階段を降りてきた。女中は、コー地方出身のノルマンジの女で、せいぜい十八だというのに、少なくとも二十歳には見えた。ジャンヌとは乳姉妹だったため、家族から娘同様の扱いを受けていた。ロザリーという名前だった。

それに彼女のおもな役目は、心臓肥大が原因で、ここ数年のうちにおそろしく肥り、いつも苦しい苦しいと訴えている女主人の歩行を助けることだった。

夫人はしきりに息を切らせながら、古い邸の玄関の階段の上までたどりつくつと、一面に川と化した庭を見てつぶやいた。

「ほんとに、正気の沙汰じゃないわ」

夫が、相変らず微笑みながら答えた。

「あなたがいいと言ったんですぞ、アデライド夫人」

妻の名がアデライドなどという大げさなものだったので、男爵はいつもひやかし半分に、うやうやしく「夫人」とつけるのだった。

それから彼女はまた歩きだし、大儀そうに車に乗った。するとバネ全体がきしんだ。男爵が並んで坐り、ジャンヌとロザリーは、後向き

席に腰をかけた。

台所女のリュドヴィーナが抱きかかえるようにして持ってきた外套は、めいめいが膝にかけて、他に二つのバスケットは座席の下にかくした。

それからリュドヴィーナは、シモン爺さんの横の席によじ登ると、大きな毛布で頭のとっぺんまで、すっぽり体をくるんでしまった。門番夫婦が、門を閉めがてら見送りにやってきて、あとから荷車で送り出すはずになっている荷物について、もう一度注意が与えられ、一同は出発した。

馭者のシモン爺さんは、丸めた背中を雨にうたせ、うつむいたまま、三つ襟外套にうもれていた。突風が唸り声をあげて窓ガラスにぶきつけ、車道に雨を叩きつけた。

二頭の馬の威勢のいいトロットに、車はみるみる河べりに出て、一列に並んだ大型船に沿って進んだ。マスト、帆桁、索具が、葉の落ちた木のように、雨空に向って悲しげにそそり立っていた。それから車は、リブデの丘の長い通りに入った。

やがていくつも牧草地を横切った。ときおり死体のようにだらりと枝を垂らした柳の木が水につかっているのが、雨のとぼりの向うにぼんやりと見えた。蹄鉄が水をかき回し、四つの車輪が激しく泥をはね飛ばした。

みんな黙っていた。頭の中で、地面と同じに濡れているようだった。アデライド夫人も、深く坐りなおして頭を後にもたせかけ、臉を閉

じた。男爵は、水びたしになった単調な田舎の風景を、憂鬱そうに眺めていた。ロザリーは、

膝に包みを置いたまま、ぼんやり夢想にふけっていた。下層の人々に特有の、あの愚鈍な夢想である。ただジャンヌだけが、長いあいだ閉じ込められていた植物がいましがた自由な空気にさらされたように、なま温いこの雨の下でよみがえる自分を感じていた。そして、彼女の喜びの厚みが、木の葉の繁みのように、陰鬱な気分からその心を守っていた。なにもしゃべりはしなかったが、歌でも歌いたい気持だった。窓の外に手を出して雨を受けとめ、それを飲みたいと思った。二頭の馬の軽快なトロットに運ばれていくのが、気のめいるような風景を見ながら、こんな大雨の中でも自分だけは安全だと感じるのが、楽しくてならなかった。

執拗な雨にうたれて馬の尻が光り、沸騰した湯のように湯気を立てていた。

男爵夫人は、少しずつ眠りに落ちこんでいった。同じ長さの六つの髪の毛の束が肩に垂れ下り、彼女の顔を額縁のように取り囲んでいる。首にできた三つの大きな波にやとと交えられているその顔が、少しずつずり落ちてくる。三つめの波は、いつのまにか彼女の胸の大海の中に吸いこまれている。頭が、息を吸うたびに持ち上っては、またすぐ前に倒れる。頬がふくらみ、なかば開いた両唇からは、大きないびきが洩れてくる。男爵が、妻のほうにかがみ込んで、巨大なおなかの上で組まれている彼女の手の中に、

小さな皮の財布をそっと置いた。

この感触で男爵夫人は目をさまし、眠りを中断されたときの、あのうつろな頭で、かすんだ眼差で、手の中のものをじっと見た。財布が落ちて、蓋が開いた。金貨と札が、車の中に散らばった。彼女もすっかり目をさまし、娘が面白そうにけたたましく笑いだした。

男爵は金を拾うと、それを妻の膝の上に置きながら、「これが、わしのエルトの土地の残金全部だ。プブルの邸の修繕に売ったのさ。これからは、プブルに住むことが多いからな」

彼女は、六千と四百フランを数えおわると、そのままそっとポケットに入れた。

先祖の残した三十一の農場のうち、これが九番目に売り払った農場だった。それでもまだ二人には、年二万フランほどの土地収入があったし、それも上手に管理しさえすれば、らくに三万フランにはなるはずだった。

質素な暮しの二人にとっては、もしも、「人のよさ」という底なしの穴がいつも家の中に開いてさえないなければ、これだけの収入で十分なはずだった。太陽が沼の水を干すように、善良さが、彼らの手の中のを蒸発させてしまうのだった。どこかへ流れ、逃げ、消えてしまう。一体どうやって？ それは誰にもわからなかった。二人のどちらかが、始終、「どうしたんだらう。たいした物も買わないのに、今日一日で五百フランなくなった」などと言っていた。もっとも、こうしてすぐ人に恵むのが、彼ら

の生きがいでもあったので、この点に關する二人の意見のみごとな一致は、はたから見ても感動的だった。

ジャンヌが尋ねた。

「きれいになったかしら、わたしのお城？」

男爵は陽気に答えた。

「今にわかるよ」

一方、豪雨もしだにおさまってきていた。

やがて、それは一種の霧に、細かく飛びかう雨滴に化した。黒雲の丸天井が高くなり、白ずんでいくようだった。そして、突然目には見えないう一つの穴から、長いななめの一条の光線が、牧場の上に降りそそいだ。

さらに、雲が裂けてその向うの青空が顔をのぞかせ、続いてその裂け目が、ちょうど布地が引き裂かれるように、ずんずん大きくなった。そして、明るく深い紺碧色の大空が、大地の上いっぱいに広がった。

気持ちのいい新鮮な風が、幸せな大地の吐く溜息のように吹きわたった。庭や林に沿って進むときには、羽を乾かす鳥の軽快な歌声が聞えた。夕暮れが近づいていた。車の中では、ジャンヌを除いて、みんな眠っていた。二度宿屋で止り、馬にひと息つかせ、水とからす麦を少し与えた。

太陽はもう沈んだあとだった。遠くで鐘が鳴っていた。小さな村で角灯に火が入り、空にも無数の星がまばたきはじめた。あちこちに人家の明りが、闇を破ってきらめいていた。そして、

突然、丘の向うに、樅もみの木の枝越しに、赤い、大きな、眠そうな月が現われた。

暖かかったので、窓ガラスは開けたままだった。ジャンヌも今では、夢想到疲れ、幸福な空想に満ち足りて眠っていた。ときおり、長いあいだ同じ姿勢でじっとしていて体のどこかが凝ってくると目を開けた。そんな時、彼女はじつと外を見る。すると、薄明るい夜の中を、農家の木立がよぎるのや、原っぱにあちこち横になっている牛が頭をもたげるのが見えた。それから坐りなおすと、みかかった夢をもう一度とらえようとするのだが、絶え間ない車の響きが彼女の耳を満たし、頭を疲れさせ、心も体もぐったりしてまた目を閉じてしまうのだった。

やがて馬車が止った。何人かの男女が、手に手に提灯を持って、ドアの前に立っていた。着いたのだ。すぐに目をさましたジャンヌは、急いで外に飛び出した。父とロザリーは百姓のさしだす明りに照らされて、疲れはてた男爵夫人をほとんど抱きかかえるようにして運んだ。夫人は疲労を訴え、消え入りそうな小さな声で、「ああ、ああ、あたし、くたびれた」と何度も繰り返した。彼女は、なにも飲みたくない、なにも食べたくないと言って横になると、すぐに眠ってしまった。

ジャンヌと男爵は、差向いで遅い夕食をとった。

二人は顔を見合せては微笑み、テーブル越しに握手しあった。そして、二人で子供のように

りきうきしながら、修理のすんだ邸の中を見て廻りはじめた。

それは、あの、もともと白かった石が今では黒ずんでしまっている、大きな農家でもあれば、貴族の館でもある住居、一族邸党を同じ屋根の下に住まわせるだけの広さを備えた、大きく高い、ノルマンジー特有の建物の一つだった。

前後についた大きな扉を開ければ、裏にも表にも出られる広いロビーが、建物の中央を貫き、建物全体を二つに区分していた。一對の階段が、ロビーにかかった橋のように、中央に広い空間を残しながら左右から登り、二階で合流していた。

玄関のすぐ右は、途方もなく大きなサロンだった。壁に張られた木の葉模様の綴織じじりには、鳥が何羽か散策している。どの家具にも、ラ・フォンテーヌの寓話を描いた、目の細かな綴織りが張ってある。ジャンヌは、子供のころに愛用していた、「狐とこうのとり」の話を描いた椅子を見つけて、嬉しさに身ぶるっていた。

サロンの先には、古書でいっぱいの書庫と、なんにも使っていない二つの部屋があった。玄関の左手には、新しく羽目板を変えた食堂、ナフキン置場、配膳室、台所、それに浴槽つき的小部屋があった。

二階は長い廊下で、二つに仕切られ、十の部屋の十の扉が、この通りに沿って並んでいた。いちばん奥の右側がジャンヌの部屋だった。二人は中に入ってみた。男爵は、屋根裏にはうっ

ておいたカーテンと家具を使っただけで、この部屋を見違えるほど新しくしていた。

フランドル製の古い壁掛けには、奇怪な人物たちがうごめいていた。

が、ジャンヌはベッドを見て喜びの叫びをあげた。蠟を塗って黒光りのしている、樫の木でつくった四羽の巨大な鳥が、まるで番兵のように、四隅で寝台を支えていた。両横の花と果実の彫刻は、二つの大きな花綵模様を形作っていた。そして、細かな溝を彫り込んだ四本の円柱にはコリント風の柱頭がのり、ばらの花とキュービッドたちの絡みあつた軒蛇腹を支えていた。ベッドは巨大な姿をずっしりと横たえていた。しかも、年を経て黒ずんだ木の冷たさにもかかわらず、いかにも優雅なベッドだった。

天蓋とベッドカバーが、向いあつた星空のようにきらめきあつていた。紺色の古めかしい絹の地の上に、そこかしこ、金糸で刺繍した大きな百合の花が、星のように散りばめられていた。ベッドに十分堪能すると、ジャンヌは蠟燭を差し上げて、綴織りのテーマを読みとろうとした。

緑、赤、黄の不思議な服を着た貴公子と貴婦人が、白い実のついた青い木の下で語りあっている。大きな白兎が一匹、わずかに生えた灰色の草を食べている。ちょうど二人の頭の上、つまり絵の約束では遠い所に、急勾配の屋根をした、小さな丸い家が五軒ある。そして、ずっと高い所、ほとんど天にとどく所に、真赤な風車

が一つ。

花を形どった大きな枝葉模様が、それらの間をうねっている。

ほかの二つの壁掛けも、最初のものによく似ていたが、ただ、フランドル風の服を着た四人の小さな男たちが家から出てきて、両腕を天に向け、大きな驚きと怒りを表わしていた。

しかし、最後の壁掛けには、悲劇が描かれていた。相変らず草を食べつづけている兎の近くに横たわっている青年は、どうやら死んでいるらしかった。男を見ながら、若い婦人はおのれの胸に剣を突き刺し、木の実は黒く変つていた。なにがなにやらわからないと諦めかけたとき、ジャンヌは片隅に小さな一匹の虫を発見した。もし生きた兎だったら、草だと思つて呑み込んだに違いないほど小さな虫だった。それでもそれは、一頭のライオンだったのだ。

はじめて彼女にも、ビラムとティスベの不運がわかった。そして、絵の幼稚さに微笑みながらも、今後この愛の悲劇の中で毎日生活していくのかと思うと嬉しかった。それは彼女に、心の中の大切な希望について絶えず語りかけ、毎晩、彼女の眠りを、あの古い愛の伝説で包んでくれるに違いない。

残りの家具は、雑多な型の寄せ集めだった。それぞれの世代がそれぞれに残していく家具、古い家を、ごちゃまぜの博物館にする、あの家具の集まりだった。補強に張った銅板の艶がみごとにルイ十四世風の箏笛の両脇には、ルイ十

五世風の肘掛椅子が、花模様の絹地のついたままで立っている。ばら材で作った書き物机の正面には暖炉があつて、その上には、丸いガラスのケースに入った帝政風の置時計が見える。

これは、蜂の巣箱の形をしたブロンズで、金色の花壇の上に、四つの大理石の円柱で支えられている。細長い穴を通して巣箱から出てくる薄べったい振子に乗った小さな蜂が、七宝焼きの羽を広げて、花壇の上をいつまでも行き来していた。

文字盤は色塗りの陶器で、巣箱の中ほどにはめ込まれていた。

時計が十一時を打ちはじめた。男爵は娘にキスをして、自分の部屋にひきあげていった。

そこでジャンヌも、しかたなく横になった。最後にもう一度部屋の中を見回して、蠟燭を消した。しかし、枕の方だけを壁につけて置かれたベッドの左には窓があつて、そこから射しこむ月の光が、床に光の水たまりをこしらえていた。

月光が壁に反射し、ビラムとティスベの動かぬ愛の情景を、愛撫するようにかすかに青白く照らしだしていた。

裾のほうの窓からは、柔かい光に包まれた木が見えた。ジャンヌは寝返りをうって眠ろうとした。それからしばらくして、いったん閉じた目を開けた。馬車の振動がまだ頭の中で続いている、まるで今でも体が揺れているようだった。はじめ彼女は、じっとしていればしまいに

は眠くなるだろうと思つて動かずにいた。しかし待ちきれない気持が、頭の中からやがて体中に広がってしまった。

両脚が痙攣し、体がしだいにほてってきた。

そこで彼女は起き上り、長いネグリジェを幽霊のように床に引きずりながら、両腕をむきだしにしたまま、はだしで、床に広がった光の水溜りを横切り、窓を開け、外を眺めた。

星間のように明るい夜だった。目の前に、昔子供だったころあれほど好きだった土地が、そっくりそのまま横たわっていた。

まず正面の広い芝生が、月明りにバターのよう黄色く見える。大きな木が二本、館の前の三角点にそびえ立っている。北がプラタナス、南が菩提樹だ。

そこからずっと、広い草地在広がっていて、その先の小さな繁みは、邸の庭の境界だった。

突端では、五列に並んだ楡の古木が、強い風を受けとめている。それは絶え間なく吹きつける潮風のため、一様に振じ曲り、押し倒され、侵食され、屋根のように傾いている。

邸の左右の端には、巨大なポプラ——ノルマンジーではブルルと呼ばれている——の長い並木道が通っていて、小作人たちの住いをご主人たちの住いから隔てていた。一方にはクイヤール家が、一方にはマルタン家が住んでいた。

このブルルが館の名の起りだった。邸の先は広い荒地で、はりえにしが生い茂り、昼も夜も潮風が、唸り声をあげて吹きまわっていた。

それから突然、海岸は百メートルの白い断崖となつてまっすぐ海に落ちこみ、その足を波に洗わせていた。

ジャンヌははるか遠くに目をやって、まるで星空の下で眠っているような、木目模様の波の、細長い表面を眺めていた。

太陽が姿をかくしたあとの、この静まりかえった世界の中で、種々雑多な大地の香りが広がっていた。すぐ下の一階の窓のまわりに這いつてきたジャスミンが、絶えず強い香りを放ち、それが軽い若葉の匂いに入りまざっている。ときどきゆっくり吹き過ぎる風に乗って、塩辛い空気と、海草の粘っこい汗との強烈な香りが鼻をつく。

ジャンヌはまず、胸いっぱい息を吸いこむという幸福に浸った。と、田舎の静寂が、冷水浴のように彼女の気持を静めた。

夕暮れとともに目覚め、夜の静寂の中にそのひそかな生を展開する動物たちが、いっせいにかすかなざわめきで薄明りの空間を満たしていた。大きな鳥が鳴きもせず、斑点のように、影のように、空をよぎっていく。見えない虫の押し殺したような鳴き声が、かすかに耳に入る。露に濡れた草、人氣のない道の砂の上を、音も立てずに走り去るものがある。

ただ、ひき蛙が何匹か、短い単調な鳴き声を、月に向つて悲しげに投げかけていた。

ジャンヌは、自分の心が広がって、この明るい夜と同様さわめきで満ち、うごめき回

る無数の欲望に突然うずきだすのを感じた。それは今、彼女のまわりで息づいている夜の動物たちにも似た欲望だった。ある親しみが、彼女をこの生きた詩に結びつけていた。と、彼女は夜のもののうい白さの中に、不思議な戦慄が走るのを、捉えようのない希望の群れが鼓動するのを、幸福がそつと溜息をつくのを感じた。

そして彼女は、恋を空想しはじめた。

恋！ それはここ二年、彼女の心をいっばいにしていた。その実現が刻々と迫ってくると思うと、不安のほうもだんだんに大きくなってきたのだ。今や彼女は恋をするのも自由である。ただ、あの人に出会いさえすればいい。あの人に！

どんな人だろうか？ 彼女にもよくわからなかったし、考えようさえしなかった。あの人は……つまりあの、それだけで十分だった。

ジャンヌにわかつていることはただ、自分がその人を心から慕い、力いっぱい愛するだろうということだけだった。今夜のような晩、星から降ってくる明るい灰を浴びながら、あの人と散歩する。二人は手をとりあい、びったり寄り添って歩く。心臓の鼓動が聞え、互いの肩が熱っぽく感じられ、二人はその愛を、夏の夜の甘美な薄明りとまぜあわす。離れがたく結びついた二人は、ただ愛しあっているというだけで、互いに相手の心の奥底まで、なんの苦もなく入りこんでいく。

そしてそれが、減びることのない夫婦の愛の

平和の中で、はてることなく続いていくのだ。

突然ジャンヌには、その人が、すぐそこに、自分の横に立っているような気がした。と、かすかな官能のおのきが全身を走った。彼女は夢を抱きしめようとするかのように、無意識に腕を胸の上で閉じた。すると、見知らぬ人へ差し出した唇の上を、なにかがよぎり、気が遠くなりそうになった。春の息吹が彼女に与えた、愛の口づけのようだった。

突然、遠く、邸の裏手の深夜の街道を、誰かが歩いてくるのが聞えてきた。狂乱した彼女の魂が跳ね上り、不可能なものへの、神意による偶然への、神聖な予感への、数奇な運命のめぐりあわせへの信念に、彼女はたちまちわれを忘れた。「あの人もかもしれない」。歩行者の規則正しい足音を、彼女はじっと息をこらして聞いていた。今に、鉄格子の門の前でびたりと止って、一夜の宿を願いにやってくるに違いない。

そのまま足音が通り過ぎると、彼女はまるで、欺されてもしたように、がっかりした。が、ふくらみ過ぎた空想に自分でも気がつく、その気違い沙汰に思わず苦笑した。

すると興奮も少しさめたので、今度はやや現実的な想像を始め、未来を打診し、生活を組み立てようとした。

あのひと、ここに、海を望んでひっそり静まりかえるこの館に、住む。おそらく子供は二人だろう。あの人には男の子、わたしには女の子と、子供たちが、プラタナスと菩提樹の間の原

っぱを駆けまわる姿が見えてきた。両親はじつと彼女を見守り、ときどきその頭越しに、深い情のこもった視線を交しあう。

こうして彼女が、いつまでも、いつまでも、空想にふけっているうちに、月はその天空の旅を終え、海に沈もうとしていた。空気がひんやりしてきた。東のはうでは、地平線が白ずんでいた。右の農家で雄鶏が鳴き、左の農家でもそれに答えた。その唳れ声は、鳥小屋の壁のずつと向うから聞えてくるようだった。そして、かすかに白味がかった無限の穹天で、星が姿を消していった。

どこかで、鳥のさえずりが始まった。はじめはおずおずとした鳴き声が葉の繁みから洩れていた。それから、だんだん大胆になって、楽し気な、朗々とした響きに変わり、枝から枝へ、木から木へと広がっていった。

ジャンヌは突然、自分が光の中に居るのを感じた。今まで手で覆っていた顔をあげ目を閉じた。明け方の輝きが眩しかったのだ。

ポプラ並木の後の、真赤に染まった雲の山が、目ざめた大地に血のような光を投げかけていた。そして、真赤な雲の層を突き破り、木々に、野原に、大洋に、地平線一面に、火の雨を降らせながら、燃えさかる大きな太陽がゆつくりと姿を現わした。

ジャンヌは、嬉しさのあまり気違いになりそのうな自分を感じた。壮大な自然を前にして、激しい喜びが、無限の感動が彼女の心をかきまわ

し、今にも気が遠くなりそうだった。わたしの太陽だ！ わたしの日の出だ！ わたしの人生の始まりだ！ わたしの希望の幕あけだ！ 彼女は、光の空間に向って腕を差し出した。太陽を抱きしめたかった。なにか言いたかった。目のあたりいま開花するこの光のように神聖な言葉を、大声で叫びたかった。しかし彼女は、無力な興奮の中で麻痺したきりだった。そして、両手に顔をうずめ、目に涙がいっぱい溢れているのに気づいた。彼女は喜びの涙が流れるにまかせた。

顔をあげると、日の出のすばらしい光景は終っていた。彼女は自分でも落着きを取り戻したような、興奮のさめたような、少しだけだるいような気持を覚えた。窓も閉めずにベッドに横になり、またしばらく夢想してから、ぐっすり寝こんでしまったので、八時になって父にいくら呼ばれても彼女には聞えなかった。目をさましたのは、父が部屋に入ってからだった。

父は、館に、ジャンヌの館に、ほどこしたお化粧を見せたがった。

邸の陸地側の正面は、林檎の木りんごの植わった広い前庭で外の道と隔てられていた。この村道は、農家の間を縫うように走り、半里ほど先でル・アーヴルとフェカンを結ぶ街道に合流していた。入口の柵から玄関の石段まで、まっすぐな道が一本ついている。海岸の石で作った茅葺屋根の小屋が、庭の左右に、二軒の農家との境の土手に沿って並んでいる。

屋根の張り変えもすみ、細かな造作も修復され、壁の修繕も終っていた。どの部屋の絨毯も新しく、建物の中のベンキも塗りたてだった。そして、銀白色の真新しい雨戸と、灰色の壮大な正面に最近塗ったばかりの漆喰が、色あせた古い館の上で、そこだけぶちのように光ってみえた。

裏側、つまりジャンヌの部屋の窓が一つ開いているのは、茂みと、風に侵された櫛の木の城壁の向う、はるか遠くに海を望んでいた。

ジャンヌと男爵は、腕を組んで、邸の中を隅々まで見て廻った。それから二人は、長いボボラ並木をゆっくり散歩した。この左右の並木道の間が、庭園と家中で呼んでいる部分である。草が木々の根元に生え、そこに緑の絨毯を広がっていた。並木の先の茂みの中には、木の葉の壁でトンネルのように仕切られた、曲りくねった道がついていて、しゃれた憩いの場所になっていた。突然兎が一匹飛び出し、ジャンヌは息を呑んだ。やがてそれは坂をかけおると、燈心草の中を、断崖に向って一目散に逃げていった。昼食後、相変らずぐったりしていたアデライド夫人が、わたしは少し横になりますと宣言したので、男爵は娘にイポールまでおきてみないかと提案した。

二人は、まず、プブルの館のあるエトヴァンの部落を通り抜けた。三人の百姓が、旧知のように挨拶した。

二人は森に入ったが、それは曲りくねった谷

沿いに海までずっと坂になって続いていた。

やがて、イポールの村が現われた。玄関に腰をおろして、古着につきを当てていた女たちが、彼らの通り過ぎるのを見守った。下り坂になった通りのまん中に溝が流れていて、人家の前はどこもごみの山だった。塩漬けの魚の臭いがぶんと鼻をついた。見すばらしい家々の戸口に乾いてある茶色の網には、所々、魚の鱗が小さな銀貨のように光っている。家の中からは、たったひと間でうごめいている、大家族の臭いが流れてくる。

鳩が何羽か、溝の縁を歩きながら、餌をあさっていた。

ジャンヌは、きよろきよろあたりを見まわしていたが、すべてがまるで芝居の舞台のように目新しく、物珍しかった。

が、塀を曲ると、突然海が見えた。不透明なすべすべした青色の海がどこまでも広がっていた。

二人は、海岸で、立ち止って眺めた。鳥の羽のように白い帆が、いくつか沖合いを通っていた。右にも左にも、巨大な絶壁がそり立っていた。その片方のずっと先には、岬のようなものが突き出して視線を遮っていたが、反対側は、目に見えない一本の線となるまで海岸線が果てしなく続いていた。

近くの入江の一つが港になっていて、何軒かの家が見えた。そして、さざ波が総飾りのように泡を立て、岸辺の小石を静かに洗っていた。

丸い石をいくつも並べた斜面の上で、陸上げされた村の漁船が、タールを塗った丸い腹を日の光に当てながら、船底を見せていた。数人の漁師が、夜の漁の準備をしていた。

そのうちの一人がやってきて、魚はいかがとすすめたので、ジャンヌは平目を一匹買った。そして、自分で持って帰ると主張した。

すると相手は、「ラスチック、ジョゼファン・ラスチック」と、何度も自分の名前を繰り返した。それを、二人の記憶にしっかりと刻み込むためだった。

男爵は憶えていようと約束した。

二人は来た道をとって返した。

魚の重みで疲れたジャンヌは、父の杖を鰐に通し、二人で両端を持った。そして彼らは、子供のようにしゃべりながら、目を輝かせ、風を切って谷を登り、家に向った。その間、平目は、だんだん二人の腕が疲れてくると、尾鰭で草をなでるのだった。

二

楽しい自由な人生が始まった。ジャンヌは読み、夢想し、また、ひとり付近をさまよい歩いた。心は空想の世界に旅立ったまま、街道沿いにゆっくりと、あてもなく歩いた。あるときはまた、曲りくねった小さな谷間を、子山羊のように駆け降りた。左右の尾根には、金の刺繍

の長いマントのように、はりえにしだの花が咲き乱れていた。その甘い強烈な香りが熱にあおられ、匂いのいいぶどう酒のように彼女を酔わせた。そして、岸辺を洗う波の遠鳴りに、彼女の心の中にもこちよい波がざわめいた。

けだるくなると彼女はよく、斜面に密生した草の上に寝ころがった。そしてときどき、谷が急に折れ曲ったところから、芝生の生えた漏斗型の斜面に挟まれて突然、ぎらぎら輝く青い海の三角形が、遠くに帆船を一隻浮かべてみえたりすると、ただもう、むしろに嬉しくなるのだった。まるで、頭の上をゆっくり輪を描きながら飛んでいる、幸福という鳥が、彼女のほうへ降りようとしているのを予感しているかのようだった。

この新鮮な土地の柔らかな空気の中で、円味をおびた風景の静寂の中で、孤独への愛が彼女を襲った。そして、丘の頂にいつまでも坐っている彼女の足もとを、小さな野兎が駆け抜けていくのだった。

彼女はよく、絶壁の上を走った。海辺の微風に打たれながら、水中の魚のように、空中の燕のように、疲れも知らず動きまわるといふ素晴らしい快感におのきながら走りまわった。

種を蒔くように、思い出を、死に至るまで根を張りつつけるあの思い出を、いたる所に蒔いて回った。彼女は自分の心の幾分かが、谷間のひだひだに、吸いとられていくように思った。ジャンヌは水泳に熱中しはじめた。健康で大

胆で、危険を知らない彼女は、海岸から見えなくなるまで泳いでいった。自分の体を揺さぶりながら運んでくれる、この冷たく、透明な、青い水がこちよかった。岸から遠く離れると、仰向けになって胸の上で腕を組む。大空の深い紺碧色をじっと眺めていると、燕が、それとも、かもめの白い影が、さつとよぎる。岸辺の小石にぶつかると、波の遠い囁きががすかに聞える。陸の雑多な物音もうねりに乗ってここまで来るうちに、ほとんど聞きとれないほどのただ一つのざわめきとなる。そこでジャンヌは体を起すと、嬉しさのあまり気違いのように、両手で水を叩きながら、甲高い叫び声を立てるのだった。ときどき、あまりに沖へ出過ぎたときには、小舟が彼女を探しにやってきた。

そんなとき、邸に戻る彼女の顔は空腹のため真青だった。それでも、足どりと軽く、浮きつきしながら、唇には笑いを、目には幸せをたたえていた。

一方、男爵は、農業経営上の大計画をたてていた。新しい試みを実施し、進歩への道を組織し、新しい道具を実験し、新しい品種を採り入れようとしていた。で、彼は、毎日必ず百姓たちと話しあいの時間を持ったが、相手はいかにも疑いげに頭を横に振っていた。

男爵はまた、よく、イボールの漁師たちと海に出かけた。近くの洞穴や、湧き水や、海面に突き出た尖った岩をひと通り見おわると、ふつうの漁師のように釣りがしたいと言いだした。

風をいっばいはらんだ帆が、漁船のふくらんだ船体を、波の背を滑るように進ませっていくとき、両舷から水中深くたらし長い釣り糸の逃げるのを、鯨の群れが追いかけてまわすとき、そんな釣り日和には、期待でうち震える手の中に、小さな綱を握りしめている。それは魚がかかると同時に、そのものがきを即刻伝える綱である。

前の日にしかけた綱をひきあげるため、月光を浴びて出かけることもよくあった。マストのきしむ音を聞くのが、冷たい夜風が激しく吹きすさぶのを胸いっばい吸い込むのが、大好きだった。そして、岩のてっぺん、教会の塔の屋根、フェカンの燈台を頼りに、ブイを探しながらさんざん漂流したあとで、日の出の最初の光を浴びながら、じっと動かずにいるのが好きだった。扇形の大きなあかえいのぬらぬらした背中や、かれいの脂ぎった腹が、甲板の上で輝いた。

食事のたびごとに、男爵は興奮しながら散歩の話をすると、男爵夫人も、ポブラ並木を今日は何回往復したか話して聞かせるのだった。

右、つまりクイヤール家の側の並木道のこと、もう一つのほうにはあまり日光が当たらないのだ。運動が大切と言われていたので、夫人は歩くのに懸命だった。夜の冷気が消えるとすぐに、彼女は、ロザリーに交えられながら庭に出る。外套と二枚の肩掛けに身をくるみ、黒い頭巾で頭をおさえつけ、さらに赤い毛糸の帽子をかぶる。

それから、少し重たいほうの左足をひきずつ

て、館の角から茂みのとつつきにある灌木までの直線を、何回となく往復する。道の端から端まで、一つは行きに、もう一つは帰りに、夫人の左足が二本の埃っぽい線をひき、そこだけすっかり草がおしつぶされていた。夫人の命令で、散歩道の両端に、ベンチが一つずつ置いてあった。そして五分ごとに立ち止っては、辛抱強い女中に向つて言うのだった。

「坐りましようよ、ロザリー。少し疲れたわ」
こうして休むたびごとに、彼女は、あるいは毛糸の帽子を、あるいは肩掛けを、それからもう一枚の肩掛けを、それから頭巾を、それから外套を、どちらかのベンチに置いていく。並木道の両端で、それは大きな衣類の山となり、昼食に帰るときに、ロザリーが空いているほうの腕にかかえていくのだった。

そして、午後にもまた散歩が始まる。昼前よりも、もっとものうい足どりで、休憩時間も長くなれば、庭に出した長椅子で一時間近くうつらうつらすることさえあった。

夫人はそれを、わたしの運動、と称していた。わたしの肥大症と言っていたのと同じである。

十年前、ときどき胸が苦しくなると訴える夫人を診察した医者が、肥大症という言葉で口にしたのだった。それ以来、ほとんど意味もわからぬままに、この言葉が彼女の頭にこびりついて離れなかった。男爵に、ジャンヌに、ロザリーに、夫人は心臓のあたりを触つてみてくれと、執拗にせがんだ。胸の厚い脂肪の下で、心臓の

鼓動は誰にも感じられなかった。しかし彼女は、新たな病気の発見がこわかったので、別の医者の診察だけは、断乎として拒んだ。そして、始終、なんにつけても、わたしの肥大症と口にするうちに、この症状は彼女だけのものであり、まるで他人には指一本触れる権利もない、彼女の私有物であるかのようになつてしまった。

男爵とジャンヌも、「洋服、帽子、傘」などと言ふのと同じ調子で、それぞれ、「家内の肥大症」とか「母さまの肥大症」と言うのだった。若いころ、夫人は章よりも細い大変な美人だった。ナポレオン麾下の将校たちの腕に抱かれて、さんざんワルツを踊ったあとで、彼女は『コリンス』(スター夫人の小説。一八〇七年)を読んで涙を流した。それ以後ずっと、まるで、この小説の烙印を押されたかのようにだった。

肥れば肥るほど、彼女の魂はますます詩的な飛躍をとげていった。そして、肥満した肉体が彼女をサロンの椅子に釘づけにしてしまつてからは、頭の中でさまざまな愛の冒険を逍遙し、自分で自分をそのヒロインであると空想した。なかでもいくつか、お気に入りの話があつた。ぜんまいを巻くと果てしなく、同じメロディを繰り返すオルゴールのように、彼女は始終それを空想の中にひき入れるのだった。燕や囚われの美女の登場する、ものうい恋歌は、必ず彼女の腕をうるませた。それに、彼女は、ペランジエ(フランスの詩人。一七八〇—一八五七。諷刺的な)の「また抒情的な多くのジャンソンをつくった」のエロチックな歌のあるものすらも、それが表わ

す愛惜の情ゆえに好んだ。

夫人はよく、現実世界から遠く離れた夢の国にひたりきつたまま、何時間もじっと動かずにいた。心の中のロマンに背景を与えてくれる、ブルブルの住いが大好きだった。近くの林が、人氣ない荒野が、すぐ目の前の海が、近ごろ読んでいるウォルター・スコットの小説を思い出させてくれるのだ。

雨の日には私室にこもつて、彼女が、「形見」と呼ぶものを、つまり昔の手紙、父の、母の、婚約時代の男爵の、さらに他の人からの手紙を取り出して眺めていた。

それは、四隅に銅のスフィングスのついている、マホガニー製の上等な書き物机の抽出しに入つていて、夫人は特別の声で、「ロザリーや、思い出の抽出しを持ってきておくれ」と言うのだった。

女中が、机の扉を開けて抽出しを抜き、ご主人の脇の椅子にそれを置くと、彼女は、ゆっくり、ときおり、涙を落としながら一通一通読んだ。

ときどきジャンヌがロザリーに代つて、母さんの散歩のお伴をすると、子供時代の思い出をいろいろ聞かせてくれた。娘は、こうした昔話に自分自身を見出し、考え、願ひごとの類似に驚くのだった。それというのも、こうして人は誰でも、自分の心こそ、世界で最初に、感動し、うち震えたと思ひ込むのだが、その実、同じ無数の感動に、太古の人の胸もおののき、こ